

<実践報告>

基礎看護技術演習におけるパフォーマンス評価の導入

児玉悠希 菖蒲澤幸子 舟越五百子 北林真美

日本赤十字秋田看護大学看護学部

要旨

看護基礎教育において実践能力を育む教育が重要視されている。A大学では看護技術を実践で円滑に活用できることをねらいとし、看護学部1年次生の基礎看護技術演習においてパフォーマンス評価を導入した。パフォーマンス評価では血圧測定を実施する演習に2つのパフォーマンス課題を提示することで、学生の説明力、態度、判断力、観察力を評価した。評価はルーブリック形式の評価表を作成しA～Cの3段階評価で行った。結果として、説明力、態度、判断力の項目ではA評価獲得者が30%前後であり、約3割の学生が良い評価を獲得したが、観察力に関してはC評価獲得者が98%であり、A評価を獲得できた学生がいなかった。結果から学生の実践的なパフォーマンスを高める教育の必要性や学生のパフォーマンスを高めるための研究課題が見出された。また、看護基礎教育にパフォーマンス評価を導入する上での教材としての研究課題も見出された。

キーワード：基礎看護学，パフォーマンス評価，技術教育

I. はじめに

看護基礎教育において、臨床実践に近い形で学習し、知識や技術を統合させる教育は重要である。このことは厚生労働省による「看護基礎教育の充実に関する検討報告書」（厚生労働省，2007）においても明記されており、現在では看護基礎教育において「統合分野」が設定されている。このような背景を受けて、近年の看護基礎教育の場では、パフォーマンス評価が注目されている。パフォーマンス評価とは、ある特定の文脈のもとで、様々な知識や技能を用いて行われる人のふるまいや作品を直接的に評価する方法である（松下，2012）。看護におけるパフォーマンス評価は、より臨床実践に近い状況を設定した課題を提示し、学生の知識や技術、思考、判断等が統合されているかを行動（パフォーマンス）から評価するものである。石川（2011）は、厚生労働省が提示した「専任教員養成講習会及び教務主任養成講習会ガイドライン」の作成背景から、看護基礎教育でパフォーマンス評価を導入することを提案している。また、看護の教育方法において、パ

フォーマンス評価が有効であることも述べている（石川，2014）。そのような背景の中、実際に看護基礎教育におけるパフォーマンス評価の実践例の報告も行われている（菅山他，2014）。しかしながら、看護におけるパフォーマンス評価に関する研究報告は少なく、その構造や形式において適切な方法を提示する報告は見当たらない。そのため、看護基礎教育におけるパフォーマンス評価は実践報告をもとに効果的な方法を模索している段階にある。

このような背景を受け、A大学においても基礎看護技術を教授する科目の演習においてパフォーマンス評価を導入した。本編では、教育実践としてのパフォーマンス評価の結果から、学生のパフォーマンスの現状を明らかにするとともに、パフォーマンスを高めるための教育研究上の課題や、教材としての課題を提示することを目的とする。そして、今後の看護基礎教育でのパフォーマンス評価の教育方法に寄与することを目指し、今回取り組んだ基礎看護技術演習におけるパフォーマンス評価の教育実践を報告する。

II. パフォーマンス評価導入の理由

A 大学における基礎看護技術演習では、主に看護技術の知識と技術を習得することを目的とした演習を行っていた。しかしながら、科目の単位取得後に対象学生が臨地実習で行う看護実践では、習得したはずの技術でも上手く実践できない様子が伺えた。そのような場面で観察される学生の反応は、患者の状態や反応、環境要因の変化に対する「戸惑い」や「混乱」であった。このような現状を受けて、看護技術の臨地実習での実践への活用を円滑に進めるための看護技術演習の必要性が見出された。

茂野（2015）は、看護技術の特徴の1つとして「状況変化への対応が求められる」といったことをあげている。この特徴はまさに臨地実習での学生の実践における「戸惑い」や「混乱」に関与する特徴である。そのため、実践での看護技術活用を円滑にするためには、「リアルな文脈の中で起こる患者の反応への対応」を基礎看護技術演習で学ぶ必要があった。このような背景から、従来の知識・技術を習得するといった教育内容の見直しを行った。そして、実践への活用につながる発展的教育を意図し、基礎看護技術演習においてパフォーマンス評価を導入することにした。

III. 方法

1. 対象者

A 大学看護学部1年次生113名に対し、基礎看護技術演習でのパフォーマンス評価を実施した。本編の実践報告における結果の提示は、パフォーマンス評価のデータを実践報告として公表することに同意が得られた52名のデータを対象とする。

2. 実施科目と実施時期

A 大学看護学部「基礎看護学Ⅱ看護技術1」の科目にてパフォーマンス評価を導入した。実施時期は第1セメスター（1年次生の6月）とした。対象者の学習内容として、演習実施時期には基礎的コミュニケーションに関する講義、演習を終了している。

3. 実施内容

1) 演習概要

実践形式で血圧測定の手技を評価する演習に、2つのパフォーマンス課題を設定することで学生の説明力、態度、判断力、観察力に関するパフォー

スを評価した。評価は従来の血圧測定の手技を評価するための評価表（資料1）と、パフォーマンスを評価するための評価表（資料2）の2つを用いることで血圧測定の手技とパフォーマンスをそれぞれ評価した。

演習は、教員が評価を受ける学生に課題シートを渡した直後より開始となる。学生が課題シートで指示される内容（血圧測定）を対象となる患者役に実施し、実施後に評価者である教員に結果を報告することで演習が終了となる。課題である血圧測定を遂行する過程にパフォーマンス課題を設定し、その課題への対応をパフォーマンスとして評価した。患者役は学生が担うが、患者としての発言は全て評価者である教員が行った。教員が患者役の発言を行うことでリアルな文脈の会話を作り出した。そして、その会話の中でパフォーマンス課題を発生させた。課題に取り組むための時間は9分とした。

2) 課題内容

学生に提示する演習シートの内容は、①患者（患者役を演じる学生、以降は患者とする）の血圧測定を実施すること、②実施した結果と判断を報告することの2つを提示した。そして、血圧測定実施の過程で2つのパフォーマンス課題を提示した。1つ目のパフォーマンス課題として、「患者からの質問」を設定した。2つ目のパフォーマンス課題として「患者からの訴え」を設定した。

「患者からの質問」では、学生が患者に血圧測定を実施するといった説明を行う際に、患者から「血圧はどのくらいがちょうどよいのか」、「血圧が高いとどうしてダメなのか」といった内容の質問を行った。この質問に対する学生の返答内容や返答態度等をパフォーマンスとして評価した。

「患者からの訴え」では、学生がマンシエットを上腕に巻こうとした際に患者がマンシエットを巻こうとしている上腕の疼痛を訴えるといった課題を設定した。この患者の訴えに対し、学生がどのように対応し、どのような測定方法を選択するか等をパフォーマンスとして評価した。

3) 評価内容

手技を評価する評価表では、血圧測定の詳細な手技や配慮について、できたかできなかったかの評価を行った。評価の項目は①患者への配慮、②測定前準備、③触診法、④聴診法、⑤後片付け、⑥報告、⑦患者への負担の7つの大項目を設定した。

資料1 血圧測定技術評価表

| 基礎看護技術 統合技術チェック (血圧測定) | | 番号 _____ | 氏名 _____ |
|--|-------|----------|----------|
| 1. 患者への配慮 | | | |
| 1) 援助内容を説明し了承を得ている | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 2) 言葉使いが適切である | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 3) 実施の際に患者への声かけを適切に行っている | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 2. 測定前準備 | | | |
| 1) 血圧計の置き場所が安定している | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 2) 上腕動脈を正確に触知できる。(3指を使って触知しており、動脈の走行に沿っている) | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 3) マンシエットを巻く際に上腕動脈の真上にゴム囊の中心がきている | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 4) マンシエットの位置は肘窩より2~3cm程度上側にある (聴診器をあてるスペースが確保されている) | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 5) マンシエットの巻き加減が適切である。(腕と水平に指2本入る程度) | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 3. 触診法 | | | |
| 1) 橈骨動脈を正確に触知できる。(3指を使って触知しており、動脈の走行に沿っている) | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 2) 加圧時、減圧時の両方で収縮期血圧を読み取ることができる | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 3) 送気球を適切に扱い、適切な速度で減圧している。(脈拍ごとに2~4mmHg) | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 4. 聴診法 | | | |
| 1) 加圧が適切である。(触診法で読み取った値から30mmHg加圧している) | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 2) 送気球を適切に扱い、適切な速度で減圧している。(脈拍ごとに2~4mmHg) | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 3) 測定値が正確である(教員との誤差が6mmHg以内) | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 4) 触診法との誤差が20mmHg以内である | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 5. 後片付け | | | |
| 1) マンシエットのエアを抜き、電源を切っている | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 6. 報告 | | | |
| 1) 正常・異常の判断も含めた報告である。(教員に促された際は「できない」となる) | | ○ | ・ × ・ 審議 |
| 7. 血圧測定による患者への負担の程度 | | | |
| 測定回数の合計が3回以内の場合を少ない、4回以上を大きいとする | | 少ない | ・ 大きい |
| 合否判定 | | | 合 ・ 否 |

資料2 血圧測定パフォーマンス評価表

パフォーマンス課題：①対象者からの質問、②対象者からの訴え(予定していた援助方法の変更)

| 課題 | 評価の視点 | A | B | C |
|--------------|-------|--|--|--|
| 対象者の質問に対する返答 | 説明力 | 質問に対し、正しい情報で返答ができています。さらに、専門用語を使わず、わかりやすい説明である。 | 質問に対し、虚偽のない返答ができています。しかし、内容が曖昧で十分な納得が得られない。または、専門用語を用いた説明であり、対象者の理解への配慮に欠ける。 | 質問に対する返答ができない。または、返答内容に誤りのある情報が含まれている。 |
| | 態度 | 言葉使いが丁寧である。さらに、返答態度が落ちついており、安心感がある。 | 言葉使いが丁寧である。しかし、返答態度に焦りや戸惑い、落ち着かない様子、不安な様子がみられる。 | 言葉使いが不適切である。または、援助実施を急ぐ様子や不快に感じる態度がみられる。 |
| 対象者の訴えに対する対応 | 判断力 | 訴えに対し、興味・関心を示すことができる。さらに、苦痛を軽減、回避する適切な方法を選択することができる。 | 訴えに対し、興味・関心を示すことができる。しかし、苦痛を助長する方法で実施している。 | 訴えがあるにもかかわらず、興味・関心を示さず、苦痛を助長する方法で実施している。 |
| | 観察力 | 訴えに対し、主観的データ、客観的データの収集ができる。 | 訴えに対し、主観的データ、客観的データのどちらかの情報を収集できる。 | 訴えに対し、観察的な関わりがない。 |

学籍番号 _____ 氏名 _____

パフォーマンスに関する評価は、定性的な評価に有効とされるルーブリック形式で評価表を作成した。「患者からの質問」といったパフォーマンス課題に対し、「説明力」、「態度」の項目を設定し評価した。「患者からの訴え」といったパフォーマンス課題に対し「判断力」、「観察力」の項目を設定し評価した。評価はそれぞれAからCの3段階での評価を行った。最高評価基準の設定は、あえて高い基準を設定した。高い基準を設定することで、演習後のフィードバックの機会を活用し、実践形式での看護パフォーマンスにおいて学生に足りない視点を養うことをねらいとした。

4) フィードバック

演習終了後に学生に評価表を返却し、パフォーマンスに関するフィードバックを実施した。評価者と学生が演習の振り返りを行い、学生に最高評価基準の内容を把握、理解させることで不足している視点への気づきを促した。

4. 倫理的配慮

実践報告を行うにあたり、協力は自由意思によるものであり、得られたデータは匿名化し個人が特定されないよう十分に配慮すること、諾否によって不利益が生じないこと等を紙面及び口頭で対象者に説明を行った。また、対象者が学生であることを考慮し、当該科目の評価が確定した後に協力依頼を行った。倫理的配慮に関しては日本赤十字秋田看護大学日本赤十字秋田短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（通知番号 30-112）。

IV. 結果

1. パフォーマンス評価結果（表1）

「患者からの質問」に対するパフォーマンス評価では、説明力の評価項目においてA評価が17人（32.7%）、B評価が26人（50%）、C評価が9人（17.3%）であった。態度の評価項目では、A評価

が18人（34.6%）、B評価が32人（61.5%）、C評価が2名（3.8%）であった。

「患者からの訴え」に対するパフォーマンス評価では、判断力の評価項目においてA評価が13人（25%）、B評価が34人（65.4%）、C評価が5人（9.6%）であった。観察力の評価項目ではA評価0人（0%）、B評価1人（1.9%）、C評価51人（98.1%）であった。

V. 考察

1. 学生のパフォーマンスについて

「患者からの質問」に対するパフォーマンスでは、説明力の評価項目においてB、Cの評価である学生が7割程度であった。質問内容が血圧に関する基本的な内容であるにもかかわらず、このような結果であったことは、多くの学生が血圧測定の手技と知識を統合できていない現状にあることが推察される。また、態度の評価ではB評価の学生が6割程度であった。B評価は説明態度に焦りや戸惑い、落ち着かない様子、不安な様子等が観察されるといった内容である。そのため、多くの学生が想定外の質問に対してとっさの対応が難しい現状にあることも推察される。

「患者からの訴え」に対するパフォーマンスでは、質問に対するパフォーマンス以上に評価が低く、学生の実践的なパフォーマンスの低さが明らかとなった。中でも特徴的な結果を示した項目が訴えに対する観察力である。観察力の評価項目においてはC評価が98%と大半の学生であり、A評価を獲得できた学生はいなかった。この結果からは患者の訴えに対する観察力（得た情報から発展的に観察項目を追加する力）が全く備わっていないことが推察され、発展的な観察の視点を教育する必要性が見出された。

2. 学生のパフォーマンスを分析する研究課題について

パフォーマンス課題に対する評価では、4つ全ての評価項目がA評価となる学生はいなかった。このことは対象者が臨地実習での看護実践を経験していないことが要因として推察され、実践的な学習を行っていない初学者にとっては寧ろ当然の結果ともいえる。しかしながら、そのような集団の中でも素晴らしいパフォーマンスで課題を解決する学

表1 パフォーマンス評価結果 (n=52)

| 評価項目 | A | | B | | C | |
|------|----|-------|----|-------|----|-------|
| | 人数 | 割合 | 人数 | 割合 | 人数 | 割合 |
| 説明力 | 17 | 32.7% | 26 | 50% | 9 | 17.3% |
| 態度 | 18 | 34.6% | 32 | 61.5% | 2 | 3.8% |
| 判断力 | 13 | 25% | 34 | 65.4% | 5 | 9.6% |
| 観察力 | 0 | 0% | 1 | 1.9% | 51 | 98.1% |

生（4項目中3項目でA評価を獲得した学生）もいた。この結果を受けて、パフォーマンスの高い学生がどのような能力に長けている学生であるかを調査することは重要である。パフォーマンスの高さに関連する学生の能力を明らかにすることは、看護のパフォーマンス向上に寄与する教育方法の提示につながる。さらに、そのような教育方法に対する研究が進展することで、学生の実践的な能力向上にもつながることが推察される。近年の看護教育で重要とされるクリティカルシンキングをはじめ、人間関係を良好に築くために必要な社会的なスキル、コミュニケーションスキルなど、学習によって身につける知識や技術以外の基盤的な能力との関連を明らかにすることで看護教育に寄与する研究結果の提示につながる。

3. パフォーマンス評価の学習効果について

パフォーマンス評価は状況の中で学習が成立する、状況に密着して学習が生じるといった状況的学習論を基盤とした評価方法であることを宮岡(2011)は述べている。看護基礎教育が実際に看護が行われる場での知識、技術を教授する教育であることを考慮すると、状況的学習論を基盤としたパフォーマンス評価は一般的に効果的であると推察される。また、今回の結果からみても学生の実践的なパフォーマンスが低いことは明らかであり、パフォーマンス評価が学生の不足している能力に働きかける教育手法であるといえる。

パフォーマンス評価を教育として実践する対象学年に関して、今回の実践報告では、対象者が看護学部1年次生と初学者であった。知識や技術、判断力、表現力などの統合的な評価を行うパフォーマンス評価は、一見して看護基礎教育における最終学年に適用される教育内容であると認識される。実際にカリキュラム上の統合分野は最終学年で履修されることが多い科目である。学習の順序性からも当然のようにそのようなカリキュラム編成が行われてきた。しかしながら、今回のパフォーマンス評価のようにあえて評価基準を高く設定し、フィードバックによって自己に不足している視点への気づきを促すことをねらいとしたものであれば、対象学年を最終学年に固定する必要はない。学習対象者のレベルに応じて適切なパフォーマンス課題を提示することで、ラダーのように看護のパフォーマンスを学ぶこ

とも可能である。パフォーマンス課題の蓄積が進み、課題を評価する方法を確立できれば、対象学年を問わず有効な学習効果が得られると推察する。

4. パフォーマンス評価を導入する上での研究課題について

山口(2013)はパフォーマンス評価では、「真正の課題」を提示することが重要であることを述べている。「真正の課題」とは、現実に近いような場面を想定した「リアルな課題」である。このことから、看護教育におけるパフォーマンス評価では、実際に看護師として働く環境、場面を想定した課題の提示が必要であることが推察される。さらに、真正の課題としての重要な特徴として、オープンエンドな課題であることも山口(2013)は挙げている。オープンエンドな課題とは、解答が1つに定まらず多様な課題である。今回の教育実践におけるパフォーマンス課題では、これらの課題としての特徴を根拠に課題を設定した。しかし、一定の条件に基づき課題を設定したものの、課題内容を評価するツールや方法が現時点ではなく、パフォーマンス課題の妥当性自体を評価するには至らなかった。そのため、課題を評価する方法を検討する必要がある。看護基礎教育にパフォーマンス評価を導入する上での今後の研究課題の一つであるといえる。

VI. おわりに

実践的な能力を育む教育が重要視されている看護基礎教育において、パフォーマンス評価を導入することに肯定的な意見は多い。しかしながら、実際にその有効性を示す研究結果の提示は不足しており、提示すべきパフォーマンス課題の構造や形式、評価すべきパフォーマンスの内容なども不明確である。そのため、今後は研究・実践報告を通してパフォーマンス評価に関する知見を蓄積していくことが重要となる。

VII. 引用文献

- 石川倫子(2011):『専任教員養成講習会及び教務主任養成講習会ガイドライン』解説—教育課程に焦点を当てて、看護教育, 52(2), 100-107.
- 石川倫子(2014):看護学教育におけるパフォーマンス評価, 看護教育, 55(8), 692-697.
- 厚生労働省(2007): <https://www.mhlw.go.jp/shingi/>

2007/04/dl/s0420-13.pdf[検索日 2018年10月19日]
松下佳代 (2012) : パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析にもとづいて—, 京都大学高等教育研究, 18, 75-114.
宮岡久子 (2011) : 教育評価の新しい流れ, 獨協医科大学看護学部紀要, 5 (2), 157-163.
茂野香おる (2015) : 系統看護学講座 専門分野 1 基礎看護学 2 基礎看護技術 I, 医学書院, 東京, 3-4.
菅山明子, 実原美和, 谷川香代, 他 (2014) : 「わか

る」から「使える」技術へのスムーズな移行を目指した技術評価, 看護教育, 55 (8), 698-704.
山口陽弘 (2013) : 教育評価におけるルーブリック作成のためのいくつかのヒントの提案—パフォーマンス評価とポートフォリオ評価に着目して—, 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 62, 157-168.

(2018年11月26日受付, 2018年12月19日受理)

< Practice Report >

The Introduction of Performance Evaluation in Fundamental Nursing Skills Exercises

Yuki Kodama Sachiko Shobuzawa Ioko Funakoshi Mami Kitabayashi
Japanese Red Cross Akita College of Nursing

Keywords : fundamental nursing, performance evaluation, technical education